



『祭の晩』
より

宮沢賢治

山の神の秋の祭りの晩でした。
亮二はあたらしい水色のしごきをしめて、それに十五銭もらって、お旅屋にでかけました。「空気獣」という見世物が大繁盛でした。

それは、髪を長くして、だぶだぶのずぼんをはいたあばたな男が、小屋の幕の前に立って、「さあ、みんな、入れ入れ。」と大威張りでどなっているのです。亮二が思わず看板の近くまで行きましたら、いきなりその男が、「おい、あんこ、早く入れ。銭は戻りでいいから。」と亮二に叫びました。亮二は思わず、つとと木戸口を入ってしまいました。すると小屋の中には、高木の甲助だの、だいぶ知っている人たちが、みんなおかしいようなまじめなような顔をして、まん中の台の上を見ているのです。台の上に空気獣がねばりついていたので。それは大きな平べったいふらふらした白いもので、どこが頭だか口だかわからず、口上言いがこつち側から棒でつつくと、そこは引っこんで向うがふくれ、向うをつつくとこつちがふくれ、まんな中を突くとまわりが一たいふくれましました。亮二は見つともないので、急いで外へ出ようと思いましたら、土間の窪みに下駄がはいってあぶなく倒れそうになり、隣の頑丈そうな大きな男にひどくぶつつかりました。びっくりして見上げましたら、それは古い白縞の単物に、へんな箕のようなものを着た、顔の骨ばって赤い男で、向うも愕いたように亮二を見おろしていました。その眼はまん円で煤けたような黄金いろでした。亮二が不思議がってしげしげ見ている

ましたら、にわかはその男が、眼をばちばちとして、それから急いで向うを向いて木戸口の方に出ました。亮二もついて行きました。その男は木戸口で、堅く握っていた大きな右手をひらいて、十銭の銀貨を出しました。亮二も同じような銀貨を木戸番にわたして外へ出ましたら、従兄の達二に会いました。その男の広い肩はみんなの中に見えなくなっていました。

達二はその見世物の看板を指さしながら、声をひそめて言いました。

「お前はこの見世物にはいったのかい。こいつはね、空気獣だなんていってるが、実はね、牛の胃袋に空気をつめたものだそうだよ。こんなものにはいるなんて、おまえはばかだな。」

亮二がぼんやりそのおかしいな形の空気獣の看板を見ているうちに、達二が又言いました。

「おいらは、まだおみこしさんを拜んでいないんだ。あした又会うぜ。」そして片脚で、ぴよんぴよん跳ねて、人ごみの中にはいつてしまいました。

亮二も急いでそこをはなれました。その辺一ぱいにならんだ屋台の青い苹果や葡萄が、アセチレンのあかりできらきら光っていました。

亮二は、アセチレンの火は青くてきれいだけれどもどうも大蛇のような悪い臭がある、などと思いつながら、そこを通り抜けました。

馬乗り殿様

わずかに笑みを浮かべながら、どこか誇らしげに馬にまたがるお殿様。晴れやかな表情と鮮やかな色彩が印象的です。下地の赤色は「蘇芳」という樹木を原料とする染料で、東北の土人形に見られる特徴です。初期の花巻人形はその深みある赤色に、梅や桜などたくさんの花が描かれます。この作品も赤や青、緑の下地に手馴れた筆さばきで描かれる花文様が見どころです。

また、構成も巧みです。前足と後ろ足のように空間をあけて作るのは当時非常に難しい技術だったと言われています。蹄や尾にポイントとなる青色を使い、袖を翻してその上に大きく花文様を描いて見せ、更には馬にまで文様を描いていることなどから、熟練の職人が新しい試みと遊び心をもって作った一点ではないかと考えられます。



花巻市博物館所蔵(高22.3 幅18.3 奥5.7)